

CAS	106467
物質名	p-ジクロロベンゼン
IARC Vol. (発行年)	73 (1999年)
遺伝子傷害性に関する知見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ in vitro 試験系では、細菌を用いる試験では陰性の結果であり、哺乳動物の培養細胞を用いる試験では弱い陽性を示した。</li> <li>・ in vivo 試験系では、遺伝子傷害性について少ないデータから結論づけることはできないと評価された。</li> </ul>
実験動物に関する知見	<p>評価：十分な証拠</p> <p>概要：マウスに経口投与した結果、雌雄で肝臓の腺腫とがん、雄で腎尿細管のがんを認めたが、腎尿細管のがん形成のメカニズムは本物質とDNAとの反応によるものではないため、ヒトの発がんとは関係しないと評価された。</p> <p>マウス、ラットに吸入暴露させた研究結果については、不十分と評価された。ラットについては、肝臓の病巣がプロモートされなかった。</p>
ヒトに関する知見	<p>評価：不十分な証拠（ジクロロベンゼン類；o-, m-, p-ジクロロベンゼンに対して）</p> <p>概要：p-ジクロロベンゼンのみの影響を対象としたコホート調査結果の記載はなかった。</p>
評価結果	上記のとおり、本物質は細菌を用いる試験で遺伝子傷害性が認められず、in vivo 試験系ではデータが少ないために遺伝子傷害性について結論を出すことができないと考えられた。